

ニュージーランドにおける後期中等教育試験と 校内評価に関する研究

奥田久春

要 旨

本稿の目的は、ニュージーランドの後期中等教育資格試験である NCEA で用いられている校内評価について、その導入背景、教育制度、評価の仕組みから整理、分析することで、評価の特徴と課題を明らかにすることである。

ニュージーランドで古くから校内評価が用いられてきたが、中等学校の推薦によっても大学入学が行われていたこと、中等5学年の SC に合格できない生徒に別途、筆記試験以外の評価が必要だったこと、中等6学年で大学入試 (UE) を受けない生徒の中等教育修了資格試験としての SFC に校内評価が導入されたことなど、校内評価への理解が醸成されていたという歴史的特徴がある。

これらに加え、コンピテンシーに基づいた評価が必要になったこと、統一資格制度のために明確なスタンダードが必要になったことが背景となり、2002年にスタンダード準拠評価を用いた NCEA が導入されたというカリキュラム制度としての特徴を指摘できる。

また、評価の仕組みの特徴として、細分化されたスタンダードごとに単位を取得するという方法と、スタンダードごとに校内評価と学外試験評価とを分離するという点が挙げられる。これによってスタンダードにおいて求められている能力が具体的に分かりやすくなるとともに、それぞれで評価される能力を明確に区別できる。一方で、教科内容の系統性が希薄になり、系統的な評価が困難になりうるという課題も浮かび上がった。また NCEA によって学んだスキルがどのように社会生活に活用されるのかという点でも大きな特徴を見出せていない。

今後は、こうした特徴と課題について他国の状況と比較することで、校内評価の国際的通用性と今後の可能性を検討していく必要がある。

はじめに

本稿の目的は、ニュージーランドで実施されている後期中等教育資格である NCEA (National Certificate of Educational Achievement) に着目して、その中で評価方法として用いられている校内評価 (Internal Assessment) について、導入の歴史的背景、教育制度、評価の仕組みと実態から整理、分析することで、その特徴と課題を明らかにすることである。

筆者は拙稿¹において、大洋州でかつて行われていた地域共通の試験 PSSC が、ニュージーランドで 1985 年まで行われていた大学入試 UE (University Entrance: UE) や SFC (Sixth Form Certificate) 資格試験の代替として実施されたものであり、そこには、校内評価が踏襲されていることを論じた。

しかしながら、その後のニュージーランド、特に NCEA での校内評価は大洋州諸国や、更にオーストラリアの校内評価とは異なる形で展開されている。大洋州における教育制度の地域的特性を考察していくために、まずはニュージーランドの校内評価の特徴を明らかにする必要がある。

校内評価とは、広義に捉えれば学校外の機関による統一筆記試験ではなく、学校内の教員が学習成果を評価することだが、狭義では授業やコースワークにおいて課されるリサーチプロジェクトやレポートなどを通して、統一された一定の基準に沿ってなされる評価を指すことが多い²。これは知識や技能を活用するという筆記試験のみでは測ることが困難な高次の能力を、言語表現で詳述された段階的な基準によって評価するスタンダード準拠評価に基づいている。また課題に対する成果物や技能を評価対象とするため、パフォーマンス評価も含まれている。ニュージーランド（及び大洋州諸国）では後期中等教育修了資格試験に用いられているのであるが、具体的にどのような制度で、どのような評価方法なのだろうか。

日本では、各国の中等教育の試験制度に関する研究は、イギリス、ドイツ、フランスなど国別の研究や事例報告として行われている³。しかしニュージーランドについては中村（2009）がNCEA導入のポリティクスについて扱った論文があるものの、それ以外は教育制度を概説する中でNCEAが紹介されているだけで、詳細まで明らかにしているものは少ない⁴。また校内評価に焦点を当てた研究は管見の限り見当たらない。

そのため、そもそもなぜニュージーランドにおいて、こうした校内評価が取り入れられるようになったのかという歴史的経緯から校内評価の変遷の特徴を明らかにする。次にNCEAが導入された背景から、教育制度やカリキュラムとしての校内評価の特徴を見出す。そして校内評価の対象や仕組み、信頼性の確保の方法を整理することで、教育評価としての特徴を検討していく。最後にNCEAへの批判と課題を整理して、今後の研究への示唆を得る。

1. ニュージーランドの後期中等教育における校内評価導入の背景

ニュージーランドにおいて校内評価が用いられてきた歴史は古い。19世紀末から20世紀にかけて、初等教育において導入されていた。もちろん、一般的に教授学習過程において教員が生徒の達成度を評価することは珍しいことではないが、ニュージーランドでは初等教育の進級のための選抜が視学官の役割から学校に移譲されるなど、早い段階で各学校で実施されていた⁵。

その後、校内評価が後期中等教育のハイスティクステストにおいて用いられるようになったのだが、その経緯として3つの流れに整理することができる⁶。一つは、1920年代には中等学校の校内認証（Accreditation）による推薦によって、大学入試（Matriculation）以外に、大学入学が可能になっていたことである。これは1944年に大学入試（UE）制度として、統一筆記試験と併せる形で整備された。この校内認証の方法には公正の観点から批判も多く、廃止も検討されたが、結果的にNCEAの導入まで継続していた。

別の流れは、1934年以降に中等5学年（現在の11年生）で行われていた学外統一の筆記試験によるSC（School Certificate）への批判である。これはSCの難易度が高く、合格率が約50%と低かったため、それ以外の評価方法も考慮することが求められたためである。結局SCへの校内評価の導入は見られなかったが、資格試験のあり方を検討する契機になったと考えられる。

更に、こうした機運の延長と捉えられるが、中等6学年（現在の12年生）で大学入試を受けない生徒に対しても中等教育修了資格が必要となったことから、1969年に創設されたSFC（Sixth Form Certificate）に校内評価が導入されるようになった。

このように、ニュージーランドの後期中等教育では、NCEAが導入されるまでにSC、SFC、UEの3種類の試験が存在していた。このうち中等6学年で受験していたSFCとUEは同一学年で2つの試

験が重なることから、1985年に中等6学年でのUEが廃止され、中等7学年（現在の13年生）で行われていた大学奨学金のためのバーサリー試験（学外統一の筆記試験）に吸収されることとなった。

このように実際に校内評価が用いられたのはSFCのみであるが、その背景には古くから校内評価に対する理解が形成されていたという歴史的特徴があったといえる。

なお、こうした国内の教育事情に加え、ほぼ同時期に海外においても校内評価が導入されるようになっていた。1960年代から1970年代は、世界的にも校内評価が議論され、導入されていた時代である。例えば、イングランド及びウェールズでは、1965年に設けられた職業や継続教育に進むための中等教育修了資格であるCSEにおいて、モードⅢという形で学校の教員が評価に関わることが可能になった。また、そうした評価は1988年にGCE・Oレベル（一般教育資格・通常レベル）と統合される際に踏襲された。

オーストラリアでは、各州によって教育制度が異なるものの、ほぼどの州においても1970年代には後期中等教育修了資格の試験において、統一筆記試験とともに「学校に基礎を置く評価」(School-based Assessment)が行われるようになった。一方でクイーンズランド州のように統一筆記試験を全て廃止した州もある⁷。

こうした海外からの影響についても検討していく必要があるものの、それは別稿に譲るとして、本稿ではニュージーランドも、海外のそうした潮流に位置していたことは指摘しておきたい。

2. NCEA への継承

こうした後期中等教育の各種試験が、2002年に整理、統合され、NCEAとして再編成されることになった。その背景として、中村（2009）は産業構造の変化や知識基盤型社会に適した人材養成のために、コンピテンシーに基づいた評価システムが必要になったこと、また学校教育修了後も生涯学習者にならざるを得ない社会において、「不合格者」のラベルを貼り続けることができないという認識があったこと、学習機会が分断されないシームレスな教育の構築が求められたことを挙げている⁸。

こうした指摘の裏付けとして、1991年にニュージーランドの教育及び職業の統一的な資格制度の構築のためにNZQA（New Zealand Qualification Authority）が設立されたことを述べておきたい。この資格制度において後期中等教育の資格も整理される必要があったからである。そして資格の認証のために明確な評価基準をもつスタンダードが必要になったと考えられる。また、1993年にはコンピテンシー型に基づいた、ニュージーランド初のナショナルカリキュラムの枠組みが策定されたこともNCEAの導入に繋がる重要な要素と考えられる⁹。つまり、コンピテンシーという高次な能力が求められるようになったことで、単一の到達度ではなく、詳細なレベル別の評価が必要となったからである。

この評価方法に関して、生徒同士の比較による集団準拠評価からスタンダード準拠評価に移行したことがNCEA導入において特筆すべきことといえる¹⁰。

先述したように、もともとニュージーランドでは、学外者より教員による評価の方が、学習へのフィードバックという点で好ましいという考え方は存在した¹¹。1980年代にNPM理論によって教育委員会が廃止され、各学校に大幅な権限が委譲されたことで学校の自律性も高まっていた。このためSFCに限定されていたものの、校内評価は支持されていたといえる。しかし校内評価であっても、グレード別の評定には、他者との比較による集団準拠評価が行われていた。それぞれA：トップ5%、B：20%、C：50%、D：20%、E：5%という配分であった。

これが、NCEAになると、言語表現による目標基準が設定されるスタンダード準拠評価が導入され、

評価基準として Excellence、Merit、Achieved、Not Achieved の4段階が設定されたのである。

このスタンダード準拠評価がオーストラリアのサドラーによって提唱されたのが、1987年になってからである。従って SFC が集団準拠評価であったのは、時代的な限界があったと考えることができる。

これらのことから NCEA の導入には、教育資格制度の構築やカリキュラム開発などに加え、スタンダード準拠評価の登場という背景があったという制度的な特徴を読み取れる。この NCEA の校内評価の方法や位置付けの特徴については次章で見ていきたい。

3. NCEA と校内評価

(1) ニュージーランドの教育制度と教育方法

ニュージーランドの教育制度は8年間の初等教育と5年間の中等教育から成る。このうち小学校は6年制と8年制があり、6年制の場合は2年間の中間学校に進むか、7年生から受け入れる7年制の中等学校に進む。制度上は9年生～13年生が中等教育である。義務教育は6歳から16歳までで、5歳になった誕生日の翌日から0年生として小学校に通うことが可能という独特の入学制度を持つ。就学前教育では遊びを通じて学ぶ教育方法が採られていたりするなど、ニュージーランドの学校教育はアクティブな学習が多い。小学校では教員が用意したテーマやトピックに沿った課題を、グループや個人で取り組む中で、教科横断的にカリキュラムの学習領域の内容を学んでいくというスタイルである。教科ごとの細かい時間割に合わせて、全員が教員のいる前を向いて、椅子に座って、机に教科書とノートを置いて学ぶようなことはほばない。むしろ低学年であれば、床に寝そべて課題に取り組むことも構わないように、個人個人の自由な学習方法が認められている。大切なことは知識ではなく「探究すること」というように¹²、プロジェクトなどの方法で学習が進められることが多い。こうした教育方法は中間学校や中等学校においても同様であり、高学年で椅子に座り、机に向かって授業を受けるようになって、個人やグループでの活動が授業の柱となる。こうした低学年からの学習方法が、NCEA でもリサーチプロジェクトなどで学習を進める基盤になっているといえる。

(2) 後期中等教育と NCEA

後期中等教育に相当するのは11年生からであり、中等教育修了資格の試験はこの学年から始まる。NCEA 1 は11年生の段階で約60教科からレベル1の科目を履修し、全国統一の学外試験（筆記試験）または校内評価を受ける。80単位を取れば NCEA 1 を修了したことになる。続いて12年生でレベル2以上の科目を履修し、同様に学外試験と校内評価を受け、60単位を取得するとともに、レベル1～3の科目から20単位を取ることで NCEA 2 を修了する。同様に13年生でレベル3の科目から60単位、レベル2以上の科目から20単位を取ることで NCEA 3 を修了し、中等教育修了資格となる。即ち、中等教育修了資格は3年間の学修によって得られるのである。また単位は科目ごとに付与されるのではない。各科目は5～8程度のスタンダードと呼ばれる学習課目から構成されており、スタンダードごとに単位が設定されている。これらのスタンダードは校内評価または学外試験のどちらかで評価されることになっており、それぞれ Achieved 以上の評価を得ることで、単位を取得、積み重ねていくことができる。学外試験でも、スタンダードごとに試験が用意されている。

このスタンダードも2種類ある。一つは「ニュージーランドカリキュラム」¹³にて扱われておらず、能力（Competency）そのものの有無が問われるのが単元スタンダード（Unit Standard）であり、同カリキュラムで設定されている教科（学習領域から細分化されたもの）の「カリキュラム段階」¹⁴別に

設定されている到達目標（Achievement Objectives：AO）に沿って作成されたものが到達度スタンダード（Achievement Standard）である。単元スタンダードは、職業技術や専門職性の高い教科に多く、「達成できた」「できていない」という2種類の基準のみで評価される（一部例外あり）。一方の到達度スタンダードは前述したように、基準として Excellence、Merit、Achieved、Not Achieved の4段階で評価される。

NZQA では、「ニュージーランドカリキュラム」にて設定されている学習領域に関わらず、65もの教科を用意しており、それぞれレベル1～3に分かれている。その中の61教科が大学入学用に指定されている（表1）。

表1 NCEA 大学入試用教科

会計、農業・園芸、生物、ビジネス学、微分積分、化学、中国語、古典、建築・機械技術、クック諸島マオリ語、ダンス、デザイン（実践芸術）、デザイン・視聴コミュニケーション、デジタル技術、演劇、地球・宇宙科学、経済、持続可能性教育、英語、仏語、地理、独語、ハウオラ、保健、歴史、芸術史、家庭科、インドネシア語、日本語、韓国語、ラテン語、数学、メディア学、音楽、ニュージーランド手話、パンガラウ、図画、写真、体育、物理、心理学、版画、加工技術、プタイアオ、理科、宗教学、サモア語、彫刻、社会科、スペイン語、統計、技術、マオリ語、ランガティラ、トンガ語、マオリ系6教科
--

出典：NZQA の HP

<https://www.nzqa.govt.nz/qualifications-standards/awards/university-entrance/approved-subjects/> 筆者訳。マオリ語による教科名はそのままカタカナ表記とした。（2019年12月13日閲覧）

なお、大学入学には、基本的な条件として NCEA3 が取得できていること、表1の教科のうち3教科からそれぞれ14単位取ること、リテラシー（読解、作文）能力が求められるレベル2以上の指定教科から最低10単位、同様にニューメラシー（数的能力）が求められるレベル1以上の指定教科から最低10単位を取得していることが求められる。

(3) NCEA における校内評価の方法

では、NCEA の各スタンダードにおいて校内評価はどのように行われるのだろうか。観察実験や、史料講読が求められる「生物」と「歴史」を例として、それぞれレベル2（いずれも2017年版）の到達度スタンダードを見てみたい。表2-1、2-2にあるように、それぞれのスタンダードが校内評価の対象か学外試験で評価されるか指定されている。先述したようにスタンダードごとに指定の単位が取得できる仕組みになっているため、校内評価と学外試験と両方を履修しなければならない訳でも、評価を合計して成績が出されるものでもない。

各スタンダードには、授業準備、授業環境、求められるタスクなどを詳述した「校内評価リソース」が用意されている。パフォーマンス評価論では、こうしたタスクをパフォーマンス課題と呼び、リサーチプロジェクト、実験や実習レポート、創作物、課題などがそれにあたる。

ここでは、同様に「生物」「歴史」のレベル2の「校内評価リソース」からタスクを見ていきたい（表3-1、3-2）。

表 2-1 「生物」レベル 2 到達度スタンダード

到達度スタンダード	評価方法	単位
指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を実施する	校内評価	4
公表されている情報の生物学的妥当性を分析する	校内評価	3
植物や動物の生活様式の適応について理解していることを示す	校内評価	3
細胞レベルでの生命過程を理解していることを示す	学外試験	4
遺伝変異や変化を理解していることを示す	学外試験	4
指導を受けながら、生態群集のパターンを調査する	校内評価	4
遺伝子発現を理解していることを示す	学外試験	4
顕微鏡レベルで生体物質を調査する	校内評価	3

出典：<https://www.nzqa.govt.nz/ncea/subjects/> より Biology Level 2 筆者訳。(2019 年 12 月 13 日閲覧)

表 2-2 「歴史」レベル 2 到達度スタンダード

到達度スタンダード	評価方法	単位
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について探究する	校内評価	4
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について検証する	校内評価	5
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事についての史料を検証する	学外試験	4
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事において人々の様々な観点を説明する	校内評価	5
歴史的に重要な出来事の因果関係を検証する	学外試験	5
歴史的に重要な出来事がどのようにニュージーランド社会に影響を与えたのかを検証する	学外試験	5

出典：<https://www.nzqa.govt.nz/ncea/subjects/> より History Level 2 筆者訳。(2019 年 12 月 13 日閲覧)

表 3-1 「生物」レベル 2 到達度スタンダードのタスク

指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を実施する
調査の焦点を絞る
調査計画の立案 ○目的と仮説、○ステップを踏んだ計画、○データ収集方法、○サンプリングの範囲、○サイズの決定と選択、○収集方法、○他の変数や要素の予測、○必要な実験、調査結果の正確性、○信頼性や妥当性などの検証方法
共同でのデータ収集やデータの共有のためのグループ計画の立案
○データ収集と記録、○仮説に基づいた調査目標の記述、○最終的なサンプリング方法の詳細な説明、○サンプリングの図式や位置図、○サンプルの配列、観察、測定などのフィールドデータの添付、○フィールドデータの加工と図表やグラフ化、○仮説に合致した加工データに基づいた品種のパターンや関係性の有無の記述、○データと結論を比較するための他の資料の調査で明らかになったことと他の資料に基づいて、調査内容に関連する生物学的知見で関係性やパターンについて議論する、○データの信頼性、方法の妥当性を検討し、調査を評価する
データの加工と明らかになったことの報告

出典：ニュージーランド教育省、ニュージーランドカリキュラムの HP (2019 年 12 月 13 日閲覧)

<http://ncea.tki.org.nz/Resources-for-Internally-Assessed-Achievement-Standards/Science/Biology/Level-2-Biology> から筆者訳。

表 3-2 「歴史」レベル 2 到達度スタンダードのタスク

ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について探究する	
探究を計画する	○課題の選択、○事前文献調査、○資料の選定、○問いの立案、○調査計画の立案
探究する	○問いの答えの十分な根拠の選択、○注釈や印によって根拠が適切であることを示す、○見やすい注釈の作成、根拠の整理、参考文献の記録
探究を評価する	○探究過程の長所、短所、成功した点、困難な点の評価、○参考文献の有用性の評価、○根拠となる資料の信頼性について議論、○探究過程全体に影響を与えた事柄の発見

出典：ニュージーランド教育省、ニュージーランドカリキュラムの HP（2019 年 12 月 13 日閲覧）

<http://ncea.tki.org.nz/Resources-for-Internally-Assessed-Achievement-Standards/Social-sciences/History/Level-2-History> から筆者訳。

これらはリサーチプロジェクト型のタスクであるが、それぞれ学問的に系統立てられていることが分かる。そして授業での一斉や個別、グループ指導を受けながら、調査を遂行していく。そして、これらの活動一つ一つを積み重ね、最終的なレポートが主な評価対象となる。つまりスキルの活用が求められる。

レポートの評価基準は表 4 のとおりである。各基準は「深く」(in-depth)と「包括的に」(comprehensively)という副詞によって差異が示されているだけであり、他教科も概ね、これらの表現が使われている。最終レポートに含まれるべき内容は「校内評価リソース」に詳細に示されているが、「深く」と「包括的に」の違いは、含まれるべき内容の量による。

表 4 「生物」「歴史」レベル 2 到達度スタンダードの基準

Achievement	Merit	Excellence
指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を実施する	指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を深く (in-depth) 実施する	指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を包括的に (comprehensively) 実施する
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について探究する	ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について深く (in-depth) 探究する	ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について包括的に (comprehensively) 探究する

出典：表 2-1 2-2 に同じ。表上が「生物」、表下が「歴史」、筆者訳。

(4) 学外評価と校内評価の関係

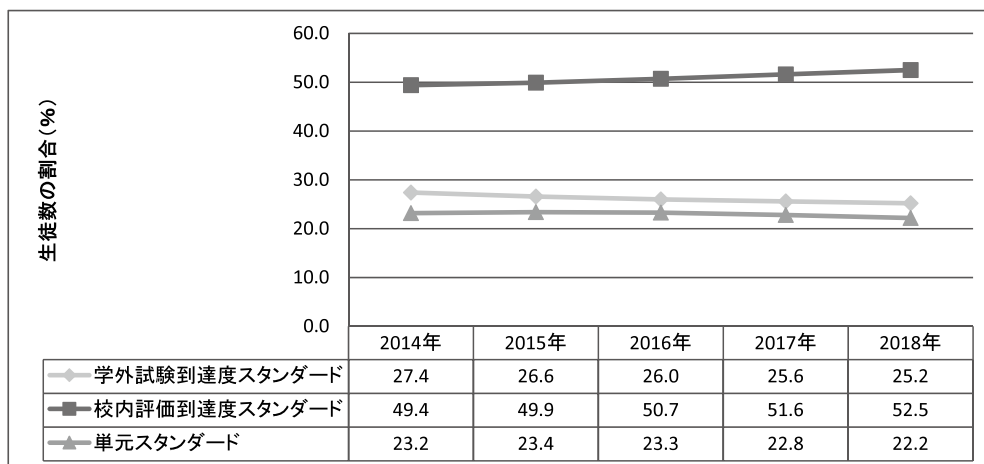
学外評価の試験は、全て論述式で行われる。そもそも知識ではなく、理解していることを示すものであるから、一問一答や穴埋め、多肢選択式の設問はない。本稿で設問を紹介する余裕はないが、学外評価と校内評価では、どちらが生徒にとって取り組みやすいのかを示す統計が表 5-1、5-2 である。これらの表から一目瞭然であるが、校内評価によるスタンダードの単位の取得割合も、成績も高いことが分かる。これは各教科において、校内評価として設定されているスタンダードの数が多いためということもあるが、授業への取り組みによって必ず評価を受けることができ、教員やクラスメイトとの相談によって容易に取り組むことができるという利点が大きいことも想定できる。筆者が行った生

徒へのインタビュー調査¹⁵においても、校内評価への準備より、むしろ学外評価への試験対策に力を入れていることが伺えた。

(5) NCEA におけるモデレーション

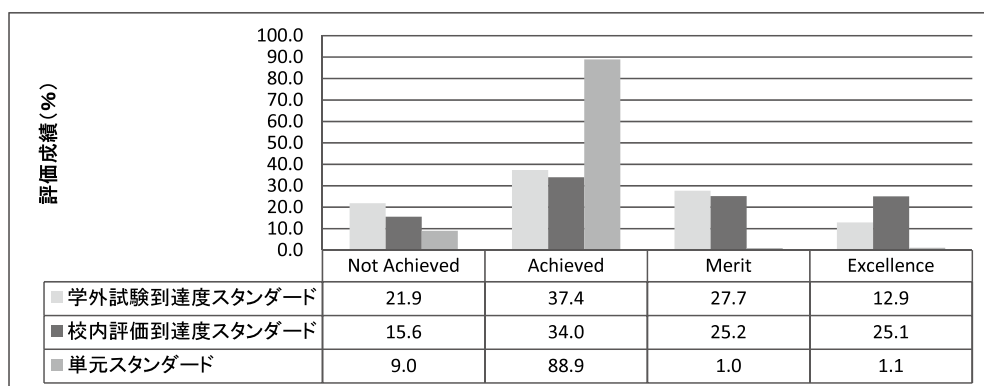
学外評価と比べて校内評価は、信頼性の確保が課題となりやすい。学校間による評価の偏りをなくし、評価の一貫性を確保するための方法はモデレーションと呼ばれるが、かつての SFC においては、学校による校内評価の偏りは、前年度の各学校の SC の成績を基に作成された教科ごとのステインナイン (stanine) と呼ばれるグレードを基にして、学外による得点調整が行われていた¹⁶。

表 5-1 NCEA2 評価方法別スタンダード単位取得者の割合



出典：NZQA (2019) Annual Report NCEA, University Entrance and NZ Scholarship Data and Statistics 2018. を筆者訳 表中の単位は%

表 5-2 NCEA 評価方法別スタンダードの成績の割合 (2018 年)



出典：前掲書をもとに筆者がグラフ化、訳したもの、表中の単位は%

しかし、NCEA では参照テストやスケーリングによる統計的なモデレーションや得点調整は行われていない。制度として設定されているのは校内モデレーション、学外モデレーションである。またその基準は到達度スタンダードに沿ったものかどうかで判断される。

校内モデレーションについては、評価にあたって必ず方法を見直し、「状況に合った文脈を捉えなおす」ことなどが規定されており、生徒の作成した調査計画や個人課題、グループ課題、最終レポートなどの成果物を想定される評価基準ごとに抽出し、教員集団による確認や議論を通してコンセンサスを得る形で行われる。一方、学外モデレーションでは、先述の生徒の成果物をランダムに抽出して、NZQA に提出し、検証、承認を得ることで行われる。

こうしたモデレーションは一般的な方法であり、オーストラリアの一部の州でも行われている。一方でオーストラリアの各州では参照テストによるスケーリングが行われ、学校間の評価の偏りをなくするための得点調整が行われるが、ニュージーランドでは行われていないのが特徴でもある。

4. NCEA に対する批判

こうした NCEA に対して賛同する意見が多い反面、批判も導入当初からなされてきた。最近でも例えば、複雑かつ細かなスタンダードに分割されたことで評価業務量やコストの増加といった運営面への批判、卒業生のスキルに変化が見られないこと、PISA の成績が下がっていることなど NCEA の効果への疑問、スタンダードの過多とコア教科の軽視、試験対策への困難さ、校内評価への信頼性への批判がある¹⁷。

NCEA の統計からも、エスニシティや経済格差による学力格差が依然変わっていないことを読み取ることができる¹⁸。

5. おわりに

このようにニュージーランド後期中等教育で行われている校内評価について、その導入背景、NCEA への継承と教育資格制度との関係、NCEA の仕組みと校内評価の方法や位置づけという観点で見えてきた。ニュージーランドでは教員が評価するという意識があり、古くから校内評価が用いられてきた。そこには筆記試験のみでは測れない能力を評価することの重要性が認識されていたことが分かる。それにも関わらず、校内評価が導入されたのが SFC でのみであったのは、校内評価の信頼性への疑問が依然としてあったと言えるだろう。しかしこうした歴史的特徴を土台とし、またコンピテンシー型のカリキュラムや全国資格制度と歩調を合わせるために、NCEA に校内評価が導入されてきたという制度としての特徴を指摘できる。そしてそれを可能にしたのが、理論化されたスタンダード準拠評価やパフォーマンス評価であったことが窺える。

ここで、NCEA の仕組みと校内評価の位置づけから教育評価としての特徴と課題を論じておきたい。まず、この NCEA では多様な教科の種類と、細分化されたスタンダードごとに単位を取得するという方法が採られている点が特徴的である。これによって、教育目標でもある各スタンダードを見れば、どういった能力が求められるのかを知ることができる。もちろんこれによって教科内の系統性を失う可能性は高いし、多様な教科を用意する分、アカデミックなコア教科を軽視することにも繋がり、中等教育の全体的な系統性が見えづらいという批判も起こりうる。これらを日々の授業において、どのように工夫するのが課題といえる。

次にスタンダードごとに校内評価と学外評価とを分離するという点も独特の方法である。これは NCEA 以前の試験制度において、両者が統合されたことがなかったことも影響しているのだろう。いずれにせよ、知識・理解とそれを表現する能力が学外試験において評価され、タスクに求められるスキルとそれを活用する能力が校内評価で評価される、ということを明確に区別できるようになったといえよう。またこのスキルは、教科にもよるが、単に知識を活用するというものではなく、アカデミックスキルなど専門性が求められるものになっている点も特徴として指摘できる。一方で、知識・理解とスキルの活用など高次の能力との系統的な評価が困難になっているという点も批判としてあり得る¹⁹。

校内と学外のモデレーションで基準の統一を図ろうとしているが、校内評価の持つ信頼性（評価の一貫性）への不信感も払しょくできているわけではなく、また学校間の評価の偏りを調整することも行われていない。また、実際に NCEA によって学んだスキルがどのように社会生活などに活用されるのかという教育評価の妥当性という点でも、大きな特徴を見出すことができない。

今後は、校内評価型スタンダードを履修する割合が高く、成績が高い点でも、ニュージーランドの校内評価が広く普及、定着していることが分かるが、その要因について、実際の学校での取り組みを調査する必要もある。こうした特徴と課題について他国の状況と比較することで、校内評価の国際的通用性と今後の可能性を検討していく必要もあろう。

付言

こうした校内評価は、18 歳人口が減少するわが国の高大接続において、従来の選抜型の大学入試（筆記試験）のあり方が問われる中で、高校教育での生徒の多面的な能力を測る方法として、またそうした高校での評価結果を大学入試において活用する可能性を検討するためにも、示唆が得られるのではないだろうか。

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号 17K04682）の研究成果の一部である。

【参考文献】

- Elley W. B. and Livingstone, I. D. (1972) External Examinations and Internal Assessments Alternative Plans for Reform, New Zealand Council for Educational Research.
- Ewing J. L., (1970) Development of the New Zealand Primary School Curriculum 1877-1970, New Zealand Council for Educational Resource.
- Gibert R., (2011) *Social context and education change: Innovations in the Queensland curriculum*, Yates L., Collins C., and O'Connor K. ed, Australia's Curriculum Dilemmas: State Cultures and the Big Issues, Melbourne University Press., pp. 163-181.
- Hall C., (2005) *The National Certificate of Educational Achievement (NCEA) Is there a Third Way?* Codd J., and Sullivan K., Education Policy Directions in Aotearoa New Zealand, Thomson Dunmore Press, pp. 235-265.
- Lipson B., (2018) *Spoiled by Choice How NCEA hampers education, and what it needs to succeed*, The New Zealand Initiative.
- School Certificate Examination Board (1972) Internal Assessment for School Certificate, School Certificate Examination Board, Wellington.
- Vallender G., (2009) *External Examinations Beyond National Borders: New Zealand and the Cambridge International*

Examinations, Vlaardingerbroek B. and Taylor N. eds, Secondary School External Examination Systems, Cambria Press, pp.291-302.

キャロライン・V・ギップス著、鈴木秀幸訳（2001）『新しい評価を求めて テスト教育の終焉』論創社。

ジェフ・ウィッティ著、久富善之他訳（2009）『学校知識カリキュラムの教育社会学』明石書店。

中村浩子（2009）「後期中等教育段階の統一資格制度改革をめぐるポリティクス：ニュージーランドの NCEA（National Certificate of Educational Achievement）を事例に」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23(1), pp. 63-79.

註

- 1 拙著（2018）「大洋州における中等教育試験制度の変遷－PSSC の廃止に着目して－」『三重大学教養教育機構研究紀要』3 巻，同（2019）「大洋州共通の後期中等教育試験 PSSC に関する考察－地域共通の試験制度の意義－」三重大学教養教育院研究紀要，4 巻。
- 2 前者の広義においては，日本の指導要録やそれを基にした調査書は，校内評価として捉えることができる。しかし後者の特に統一された評価基準による評価とはいえない点で，区別して考えたい。
- 3 例えば日本比較教育学会編（2016）『比較教育学研究』53 号の特集「比較教育の視点からみた日本の大学入試改革」や文部科学省ウェブサイト「世界の学校体系」https://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/detail/1396836.htm（2019 年 12 月 13 日閲覧）など
- 4 青木麻衣子・佐藤博志編著（2014）『新版オーストラリア・ニュージーランドの教育』東信堂。はニュージーランドの教育を制度やカリキュラム，社会との関係を詳細に論述した唯一の和文献であるが，NCEA についての記述は約 3 ページと多くはない。
- 5 School Certificate Examination Board (1972) p.3 や Ewing J. L., (1970) pp. 136-141.
- 6 Elley W. B. and Livingstone, I. D. (1972) の Chapter 2, A Brief Historical Synopsis of New Zealand Examination (pp.17-27) を基に筆者が 3 つの流れとしてまとめた。
- 7 Gibert R., (2011) p.169 に詳しい。
- 8 中村（2009）pp.64-68.
- 9 New Zealand Curriculum Framework, なお，この中ではコンピテンシーとは呼ばず，Essential Skills という用語が用いられていたが，コンピテンシーと同等のものと考えることができる。
- 10 Hall C., (2005), Lipson B., (2018), 中村（2009）。
- 11 Hall C., (2005) の説明による (p. 235)。
- 12 筆者がオークランドの中間学校を訪問した際の校長の言葉（2018 年 9 月）。
- 13 1993 年の New Zealand Curriculum Framework の後継として 2007 年に策定された現行のナショナルカリキュラム。この中で Essential Skills はキーコンピテンシーに変わった。
- 14 「ニュージーランドカリキュラム」において，1 年生～13 年生まで通してカリキュラムの内容とレベルが設定されており，身につけるべき能力が 8 段階で示されている。11 年生～13 年生は 6～8 段階に該当する。
- 15 2018 年 2 月，2019 年 9 月，オークランド郊外の公立中等学校 2 校にて，各校より 5 名の生徒に学校外試験と校内評価への意識調査を行った。本調査の詳細は別稿に譲る。
- 16 Vallender G., (2009) p. 293.
- 17 Lipson B., (2018) より。
- 18 NZQA (2019) Annual Report NCEA, University Entrance and NZ Scholarship Data and Statistics 2018.
- 19 中村，前掲書

A Study on the Internal Assessment in Secondary Education in New Zealand

Hisaharu OKUDA

Abstract

The purpose of this study is to explain the features of the Internal Assessment (IA) used in National Certificate for Educational Assessment (NCEA) in senior secondary education in New Zealand, from the perspectives of historical background, education and certificate system, and assessment structure.

In New Zealand, the IA was introduced in primary and secondary schools. This study notes the following historical aspects; the accreditation system for University Entrance was implemented, another assessment possibility became necessary for unsuccessful students in Fifth Form School Certificate, and the IA was introduced for the Sixth Form Certificate.

Further, this study explains the curriculum system as a feature of IA because of the following reasons; the competency based assessment was required in the New Zealand Curriculum Framework, the assessment standards were needed in newly developed national qualification system, and the assessment method was shifted from norm referenced assessment to standard referenced assessment when NCEA was introduced.

As for the aspect of assessment structure, this study analyzes the system in which students earn credits allocated to each Achievement Standard and not to each subject, so the IA and External Assessment (EA) are separately implemented. These two features of IA allows students to concretely understand the objectives of skills in each standard and also distinguishes the feature of each skill assessed in IA and EA. On the other hand, this study finds critical points that systematical teaching and assessment in a subject has become difficult and how the skills learned in the NCEA are to be utilized in future social life has not become clear.

Finally, this study suggests necessary research, as the next step, on an internationally applicable possibility in future through comparative analysis with other states in which the IA has been introduced.